

看護学生が多重課題の優先度を判断する 小児看護演習プログラムの開発と検討

Development and examination of a child health nursing exercise program for nursing students to judge the priority of multiple tasks

本田 真也 横山 利枝 中島 登美子*
Shinya HONDA Toshie YOKOYAMA Tomiko NAKAJIMA

Abstract

This study aims to develop an on-campus child health nursing exercise program to help students prioritize when facing multiple tasks and interruptions, and to examine utility by reviewing their learning. We conducted the program for 15 fourth-year students at a university. A qualitative descriptive analysis was then conducted to gauge their learnings based on the reflection sheets they wrote during the exercise. The following ten items were listed: "1. impatience due to schedule changes," "2. difficulty in handling with children while preparing for treatment," "3. necessity of knowledge and skills to make decisions," "4. difficulty in deciding priorities instantly," "5. responding flexibly," "6. importance of cooperation with paired nurses," "7. understanding the child's condition and medical status in advance," "8. anticipating possible situations," "9. consideration for children and their families," and "10. checking the environmental safety." The results were discussed from the perspective of the exercise objectives: "to be able to explain the concept of basic priorities when facing multiple tasks and time urgency" and "to be able to think of appropriate decisions and responses." Although the program posed some limitations in terms of whether the students could carry out the nursing skills and make appropriate requests to their paired nurses, the students learned as much as earlier studies. Therefore, the program can be used in the future.

キーワード：多重課題, シミュレーション演習, 統合看護実習

I はじめに

新人看護師の離職率は2005年に9.3%と高く¹⁾, その一因として, 医療の高度化や在院日数の短縮化, 医療安全に対する意識の高まりなどの国民のニーズの変化を背景に, 臨床現場で必要とさ

* 関西国際大学保健医療学部

れる臨床実践能力と看護基礎教育で修得する看護実践能力との間には乖離が生じていることが指摘されている²⁾³⁾。新人看護師の離職理由はリアリティショックが最も多く⁴⁾、その内容ではケアへの対応能力の一部としての複数受け持ちや想定外のケア、標準化したケアからの逸脱などが明らかとなっている⁵⁾。新人看護師は、複数の患者を同時に受け持ちながら、限られた時間の中で業務の優先度を考え、多重課題に対応しなければならない状況にあり、一つの業務を遂行する間にも他の業務による中断がある等、複雑な状況に即応できる能力が求められている一方で、看護基礎教育における実習は学生が一人の患者を受け持ち、その患者及び家族と関わりながら、看護ニーズを判断し、看護ケアを計画、実践し、評価するものである⁶⁾という矛盾も指摘されている。また、チームメンバーの一員として、臨床現場の多重課題の優先度を考えながら時間内に業務を実施するなどの能力を、基礎教育の中で身につけることは極めて困難である⁶⁾ことから、厚生労働省より2011年に新人看護職員研修ガイドライン²⁾、2014年にはその改訂版³⁾が出され、新人看護師への研修体制の充実が図られている。このような取り組みにも関わらず、新人看護師の離職率は2015年には7.5%⁷⁾と減少がみられたものの、2020年には8.6%⁸⁾と横ばいの状態が続いている。

一方、看護基礎教育では、新人看護師への移行演習プログラムとして、学内における演習プログラム⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾や臨床での看護実践により近い実習形態として夜間実習や複数受け持ちなどを組み込んだ総合実習¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾などが行われており、学生の高い満足度や一定の成果が得られている。臨床現場においても、新人看護師を対象とした研修において4床部屋における多重課題シミュレーション¹⁵⁾、1人の患者に対する複数の看護技術の提供¹⁶⁾や模擬患者とのコミュニケーション¹⁷⁾を含んだ多重課題シミュレーション、小児医療施設における多重課題シミュレーション研修¹⁸⁾など、いくつかの取り組みが行われている。

以上のことから、4年次の学生を対象とする統合看護実習において、多重課題の優先度を判断するための小児看護学内演習プログラム（以下、演習プログラムと略す）を開発した。本演習プログラムに学生が参加することで、新型コロナウイルス感染症で病院での実習期間が短縮される中、看護学生から看護師へと移行する過程での実践能力の修得と卒後の職業適応につながるのではないかと考える。

II 研究目的

多重課題、割り込み業務のある状況において優先度を判断するための学内演習プログラムを開発し、その実施による学生の学びの内容と達成度をもとに振り返ることで、本演習プログラムの活用可能性を検討する。

III 方法

1. 対象

A大学の4年次生で、統合看護実習を小児看護学分野で履修した学生15名のうち、同意を得られた者とした。

2. 演習内容

2.1. 演習目標

本演習プログラムの主たる目標は、「多重課題・時間切迫の状況下における基本的な優先順位の考え方を説明できる」こと、的確な判断と対応を考え、「シミュレーションにおいて、必要となる看護の遂行ができる」ことであった。また、本演習プログラムは統合看護実習における病院実習前のプログラムとして行ったことから、シミュレーション事例への看護を考える過程を通じて、「シミュレーション事例における子どもと家族に必要な看護が整理できる」ことで、子どもの病状の緊急性を判断するための知識を身に付け、自身が行うべき看護を見出し、その方法を学習すること、「実習に向けての自己の課題を見つけられる」ことも演習全体の目標とした。

2.2. 演習プログラム準備

(1) 演習プログラムの時期・期間

今回、学生は統合看護実習で小児専門病院や総合病院の小児・成人混合病棟で実習を行う予定であり、その病院実習前に5日間かけて行った。病院実習前に実施した理由としては、演習プログラムを通して多重課題・時間切迫の状況下で考えなければならないことを明確にしておくことで、実際に病院において看護師の動きをみるうえでの視点をもって実習に臨めると考えたためである。

(2) シミュレーション事例の準備

小児看護の臨床場面で実際に考えられる優先順位の判断や臨機応変な対応が必要となる状況が複数発生するようなシミュレーション事例を作成した。学生は、3～4名ずつの実習グループで構成されており、それぞれのグループが実習を行う病院や病棟に入院する子どもとその家族を想定して、疾患や年齢、時間帯、業務内容などの特徴を設定した事例を4種類作成した(表1)。今回のシミュレーションにおける事例の難易度として、学生の能力を考慮して、3つのケースを2名の学生で受け持つという設定とした。各シナリオには、学生がその子どもに必要な看護を考えることができるよう、子どもの年齢や性別、疾患や病状、時間の決まっている手術や処置、ADL、時間内にすべき処置を記載した。また、割り込み業務として、オンコール手術の時間についての電話、ナースコール、病状の変化(例、SpO₂の低下)などのほかに、小児において特徴的な母子分離による啼泣、処置を嫌がることなどを組み込んだ。なお、割り込み業務については、その場での臨機応変な対応を考えてもらうために、その内容について学生へは事前に伝えないこととした。

(3) シミュレーションを行うための準備

実習室に病室を設定し、点滴や酸素マスクなど、学内で準備可能な物品を配置した。また、清拭や薬剤投与、バイタルサイン測定などの準備をするナースステーションや処置室などは、実習室内の少し離れたところに場所を設定した。患者である子どもやその家族の役割は、シミュレーションを行っていない別のグループの学生が担当することとしたが、乳児や幼児などは、年齢の近いモデル人形を配置し、子ども役の学生が声を出したり、動きを加えてもらうこととした。

表1. シミュレーション事例の概要

<p>グループ1</p> <p>A：6歳・男児・上衣種（脳腫瘍） 現時点で特に症状はなし。日常生活も自立している。陽子線治療（全身麻酔）のために入院している。末梢静脈ルートあり。11時30分に陽子線治療の予定（検査後に移送するためのベッドが必要）であったが、遅れている。</p> <p>B：1歳3か月・女児・腎芽腫 化学療法目的で、11時半頃に母親に連れられて入院となった（入院時オリエンテーションが必要である）。朝に家を出てから、何も食べておらず、空腹で不機嫌となっている。</p> <p>C：5歳3か月・男児・脳性麻痺、気管軟化症 気管切開で人工呼吸器管理を行っている。自力での体動はなく、2時間ごとに体位変換が必要である。SpO₂の低下に合わせて気管内吸引を行っている。10時頃に入浴、気管内吸引、体位変換を行っている。昼食は胃瘻からミキサー食の注入があり。</p> <p>割り込み業務 ①Aくんの陽子線治療の電話連絡（時間決定）、②CくんのSpO₂の低下</p>
<p>グループ2</p> <p>A：3歳8か月・男児・脳性麻痺 発熱・呼吸困難が出現したため、入院となった。現在は解熱し、呼吸状態は改善した。10時に経鼻経管栄養があり。</p> <p>B：1歳2か月・女児 痙攣重積のため、昨晚、入院となった。末梢静脈ルートを確認し、抗痙攣薬の投与で痙攣は一旦消失した。母親に代わり、朝から祖母が付き添っている。</p> <p>C：5歳6か月・女児・扁桃摘出術後1日目 朝食前に鎮痛剤を点滴（左手背に末梢静脈ルート）したが、痛みが強く、朝食はほとんど食べられなかった。11時に病棟へ転棟予定であり、清拭を行わなければならない。</p> <p>割り込み業務 ①Bちゃんの痙攣発作、②Cちゃんからのナースコール（痛みの訴え）</p>
<p>グループ3</p> <p>A：4歳6か月・女児・急性リンパ性白血病 CVカテーテルを挿入している。15時から、病棟の処置室にて、腰椎穿刺・髄注の処置予定となっている。</p> <p>B：10か月・男児・網膜芽細胞腫・眼球摘出術後 化学療法目的で入院しており、CVカテーテルを挿入している。骨髄抑制があり、アイソレーターに隔離されている。母親が付き添っている。15時に予定の薬剤投与がある。</p> <p>C：3歳6か月・男児・ウィルムス腫瘍・化学療法 CVカテーテルあり。骨髄抑制はなく、病棟内の移動は可能である。家族の付き添いなし。</p> <p>割り込み業務 ①Aちゃんが処置をすることを嫌がる、②Cくんからのナースコール（排泄介助）</p>
<p>グループ4</p> <p>A：5歳10か月・男児 左上腕頰上骨折のため、9時から手術を予定されている。8時45分に前投薬を飲ませるように指示あり。</p> <p>B：2歳3か月・男児 気管支炎で入院していたが、本日退院予定である。朝食後、機嫌よくテレビをみていた。夜間も付き添っていた母親は朝食のため、病室を離れている。</p> <p>C：1歳6か月・女児 肺炎で入院1日目。発熱と呼吸雑音があり、酸素2LでSpO₂95～96%、夜間も1～2時間ごとにSpO₂が低下し、鼻腔内の吸引が必要である。左手に末梢静脈ルートがあり。湿性咳嗽が頻回で夜間も眠れず、付き添っている母親も疲れている。</p> <p>割り込み業務 ①CちゃんのSpO₂低下、②Bくんの母親がいないことでの啼泣</p>

3. 演習の実際（表2）

3.1. 学生配置

本演習プログラムに参加した学生は15名であった。この15名の学生を統合看護実習が予定されている病院・病棟ごとに3、4名のグループとした。そして、グループの中で2名のペアを作り、ペアワークや実際のシミュレーションを行った。なお、3名のグループは、シミュレーションの行動計画は3名で考え、シミュレーションの実施は2名ずつで1名の学生が2回、看護師役を行っ

表 2. 演習プログラムの概要

- | |
|---|
| <p>1. 多重課題シミュレーション演習の課題（事例の概要と時間内にすべき課題）提示</p> <p>1) 個人ワーク：学習項目の整理と自己学習</p> <p>2) グループワーク：学習項目の共有と不足部分の確認</p> <p>2. 多重課題シミュレーションの行動計画の作成</p> <p>1) 個人ワーク</p> <p>2) ペアワーク（シミュレーションを行うペア）</p> <p>3) グループワーク（実習グループごと）</p> <p>4) 発表とディスカッション（行動計画の発表と基本的考え方の共有）</p> <p>3. 多重課題シミュレーション</p> <p>1) 1回目：ペアで看護師役を実施する（30分間）</p> <p>2) 振り返り（看護師役・観察者役・子ども役・家族役のそれぞれの立場から）</p> <p>3) 2回目：もう一方のペアが実施する（30分間）</p> <p>4) 振り返り（看護師役・観察者役・子ども役・家族役のそれぞれの立場から）</p> <p>4. 全体まとめ（優先度を判断する思考過程）</p> |
|---|

た。

3.2. シミュレーションに向けての事前準備

シナリオを学生に配布し、各事例で時間内に行ってもらった課題を説明した。学生はまず、シナリオに目を通し、シミュレーションを行うために必要な学習項目を個人ワークで明らかにし、事例の疾患や治療、看護援助に必要な知識や技術について学習を進め、グループでその内容を共有した。次に、3名の子どもとその家族にどのような順番で、どのような看護援助を行うのかの行動計画を個人ワークで考え、次にペアワークによって行動計画を調整し、最終的に各グループでその内容を共有した。そして、各グループで考えた行動計画やそのように考えた意図を全体で発表し、多重課題を遂行するための基本的な考え方の共有を行った。

3.3. シミュレーションの実施

学内の実習室にて、シミュレーションを行った。4つのグループがあったため、大きく2つに分けて並列で行うこととした。各グループには、シミュレーションの進行を操作するために、教員を1名ずつ配置した。

シミュレーションの進行は、まず、1つめのペアがシミュレーションを実施した後、振り返りシートの記載、ディスカッションを行い、行動計画を修正した後、2回目はもう一方のペアがシミュレーションを行い、振り返りのディスカッションをすることを一つのサイクルとした。割り込み業務は1回目には一つ、2回目にはさらにもう一つ入れることで、1回目から2回目にかけて事例の難易度を上げるように工夫した。なお、シミュレーションの実施時には、看護師役を行っていないもう一方のペアは看護師役を行っている学生の行動についての観察者とし、シミュレーションを行っていないグループの学生は子どもや家族役を担当した。

なお、振り返りは、実施者には、シミュレーション課題である「状況に対応した優先順位の判断と決定ができたか」「的確な看護ケアの遂行ができたか」「適宜、ペアの看護師との調整、協力ができたか」という3つの視点で、1（できなかった）～10（できた）点の10段階での自己評価を行ってもらった。また、これらの項目を実行するために必要なことや実施して考えたこと、気づいたことについて振り返ってもらった。評価者にも、実施者と同じ3つの視点・方法で他者評価を行い、その点数とした理由やよくできた点、改善点を振り返ってもらった。子どもや家族役の学生には、それぞれの役割の視点で感じたことや考えたことを振り返ってもらった。

3.4. まとめのカンファレンス

シミュレーションを行った翌日に、全体でカンファレンスを行った。「優先順位を判断するために必要なこと」「割り込み業務が入った際の調整に必要なこと」から、優先度を判断する思考過程について全員でディスカッションを行った。また、「シミュレーションの体験から、病棟実習で学びたいこと」についても考え、本演習プログラムを踏まえて、今後行われる病院実習での目標や行動計画を修正し、演習プログラムを終了した。

4. データ収集方法

4.1. データ収集方法

シミュレーションを実施した直後に学生が記載した振り返りシートの記述内容、シミュレーション課題の達成度の自己評価・他者評価の点数をデータとした。評価項目は「状況に対応した優先順位の判断と決定ができていた」、「的確な看護ケアの遂行ができていた」、「適宜、ペア看護師との調整、協力ができていた」の3つで、各項目1（できなかった）～10（できた）点の10段階で評価してもらった。

また、5日間の演習プログラム終了後の演習目標に対する到達度の自己評価の点数についてもデータとした。評価項目は、「多重課題・時間切迫の状況下における基本的な優先順位の考え方が理解できた」、「シミュレーション事例における子どもと家族に必要な看護が整理できた」、「シミュレーションにおいて、必要となる看護の遂行ができた」、「実習に向けての自己の課題を見つけることができた」の4つで、同様に10段階で評価してもらった。

4.2. 分析方法

振り返りシートの記述を熟読し、シミュレーションを実施しての学びとして、学生の気づきや優先順位を判断するために必要なこと、割り込み業務が入った際の調整に必要なことについて書かれた内容を抽出し、その内容を複数の研究者で検討した。また、シミュレーション課題の達成度の自己評価と他者評価、演習目標の達成度の自己評価の点数は単純集計を行った。

5. 倫理的配慮

本演習の開始前に、学生に対して、本研究の目的や方法の概要、同意は任意であり、同意しなくても成績への影響はないこと、個人情報保護等について、口頭および文章にて説明を行い、同意を得た。なお、本研究は関西国際大学研究倫理委員会の承認を得た（承認番号 R3-14）。

IV 結果

1. 研究協力者の概要

研究協力者は15名であった。学生は通常、3年次に2週間の小児看護学実習を履修し、1週間の保育園（所）実習と1週間の小児病棟での実習を経験するが、研究協力者のうち14名は新型コロナウイルス感染症の影響による多くの制限の中で小児看護学実習を行った学生であった。そのため、15名のうち小児病棟での実習を経験できたものは2名であり、13名は学内での事例展開とバイタルサイン測定、退院指導のロールプレイでの代替実習を経験していた。また、保育園（所）実習を経験できたものは5名で、それ以外の10名は短時間の訪問による保育園での健康教育の実

施のみの経験であった。

2. 学生の学びの内容

演習プログラムを通して学生が記載したシミュレーションの振り返りシートの内容として、以下の10項目に集約された。以下、【 】は項目、< >は学生のリフレクションシートへの記載内容を示す。

2.1. 【予定変更による焦り】

学生は、事前に得た情報から行動計画を立てペア学生と調整していたが、予定変更や急変で業務が重なり、予定通りに進めることができなくなったことで、それらの問題にどう対応すればいいかわからず戸惑い、<役割を決めていたはずなのに焦ってしまった>としていた。焦ることで、<子どもや家族に声かけを忘れた>ため、<途中にしたまま別の子どもへの対応を行い、子どもや家族を不安にさせてしまった>としていた。そのため、<慎重にすること、落ち着いてから気持ち切り替えることも必要である>としていた。

2.2. 【処置準備をしながら子どもに対応する難しさ】

経管栄養や吸引などの処置をしながら、子どもの状態を観察したり、行動に対応したりと<一人で準備をしながら子どもの機嫌を取るのが難しい>や家族に対応しているときにナースコールが次々に鳴り、<家族や子どもに声かけができたらよかった>など複数対応の難しさを感じていた。

2.3. 【判断するための知識・技術】

的確な看護ケアを行うためには、<知識がないとどのケアを行うのも難しい>とし、<ケアの手順や手技は頭に入れて自信をもってかかわる>ことで、<手元に集中せず周りを見る余裕につながる>としていた。また、<異変にすぐ気づける知識や観察力>、<急変するリスクや今後起こりうる問題を予測する知識>など<判断するために最も必要なのは知識>であるとしていた。

2.4. 【瞬時に優先順位を決める難しさ】

急変時や割り込み業務など、<瞬時に起こる物事に対して、自分でその場で優先順位を決めなければならない>。そのため、<子どもの状態を把握するために観察をしながら優先順位を考えて対応する>ことや<割り込み業務と自分が今している業務の優先順位を短時間で判断する力>が必要であるとしていた。また、優先順位を考えるときには、<処置や検査の時間に合わせて行動計画を立てる>というように<時間軸で考えて時間をうまく組み立てて行う>ことが必要であるとしていた。

2.5. 【臨機応変に対応する】

優先順位を判断するためには、<子どもの機嫌や家族の状況によって臨機応変に対応する>ことが必要であるとしていた。<子どもの症状や状況を見て何の看護が必要か見極める>、<冷静な判断のもと臨機応変に対応する>、<臨機応変に対応する能力と時間の設定を行えるようにしておく>ことも必要であるとしていた。

2.6. 【ペアと連携する大切さ】

学生全員がペア看護師との連携の大切さを実感していた。複数対応をするためには、<ペア看護師と情報共有や事前の打ち合わせ>を行い、役割分担をしているが、急変や割り込み業務があったときに<ペア看護師と報告・連絡・相談などを通じて連携を取りながら行う>ことが大切であ

るとしていた。そして、〈お互い積極的に行動し、指示を出し合えれば、子どもや家族に向き合う余裕もできた〉と感じていた。

また、〈どうしても対応が必要なときは一人でやろうとせずに助けを呼ぶ〉ことや〈ペア以外の看護師や医療従事者に応援を頼む〉などチームワークの大切さにも気づけていた。

2.7. 【子どもの状態・病状を事前に把握】

割り込み業務が入った際、優先順位を判断するためには〈子どもの状況や病状を事前に把握〉しておき、〈起こりうる状況によって対応、判断しなければいけない〉としていた。〈症状の程度、急性期、緊急度の高い子どもを優先〉し、〈生命にかかわること、急変する危険の有無、程度〉など〈子どもの緊急度のアセスメントを行い、処置を行う優先度を定める病状の把握〉が必要であるとしていた。

2.8. 【起こり得る状況を予測】

的確な看護ケアを行うためには、〈あらゆる状況を見据えて行動する〉必要があるとしていた。〈急変するリスクや今後起こりうる問題を予測〉し、起こりうる状況によって〈どう対応・判断しなければいけないのかを事前に考えておく〉必要があるとしていた。〈ケアを行う前に、何が必要か、どのように動くか、何が起こるかなど事前に様々な準備〉をしておき、〈起きた時にどのように対処するのかを理解しすぐ行動できる〉よう十分な事前準備、知識が必要であるとしていた。

2.9. 【子どもと家族への配慮】

割り込み業務が入った際、〈対応できない子どもや家族に対する配慮〉が必要であり、〈行くはずだった子どもに遅れることを伝える〉としていた。また、時間を気にしすぎると〈子どもや家族への対応がおろそかになり、子どもに向き合えないと寂しい思いをさせてしまう〉ことになるため、〈一人ひとりに丁寧に接することを心掛けたい〉としていた。そして、〈家族の話をしっかり聞いて思いを表出できるような声かけや環境づくり〉、〈子どもや家族とのコミュニケーション〉が大切であるとしていた。

2.10. 【環境の安全性を確認】

看護ケアを行う際、〈子どもは痛みや怖さを我慢できないため、暴れる可能性があり事故防止を行う〉必要があり、〈子どもの周りの環境整備を行う〉必要があるとしていた。また、子どもの周りをよく見て、〈子どもに正しい治療が行われているか、ベッド周囲の環境は大丈夫か確認する〉とし、〈事故防止を行い、これ以上悪化させない対応〉が必要であるとしていた。

3. シミュレーション課題の達成度の評価

毎回のシミュレーションが終わった時点での学生の課題達成度の自己評価の平均値は10点満点のうち、優先順位の判断と決定は6.8点、的確な看護ケアの遂行は5.9点、ペア看護師との調整・協力は6.4点であった。観察者による他者評価の平均値は、優先順位の判断と決定は7.9点、的確な看護ケアの遂行は7.7点、ペア看護師との調整・協力は8.5点であった（表3）。

4. 演習目標の達成度の自己評価

演習プログラム終了時の演習目標の達成度の自己評価の平均値は10点満点のうち、多重課題・時間切迫の状況下における基本的な優先順位の考え方の理解は8.2点、シミュレーション事例にお

表 3. シミュレーションへの自己評価・他者評価

	範囲	平均(±SD)
自己評価	状況に対応した優先順位の判断と決定ができていた。	4-9 6.8 (±1.6)
	的確な看護ケアの遂行ができていた。	4-7 5.9 (±0.9)
	適宜、ペア看護師との調整、協力ができていた。	4-10 6.4 (±1.5)
他者評価	状況に対応した優先順位の判断と決定ができていた。	4-10 7.9 (±1.8)
	的確な看護ケアの遂行ができていた。	4-10 7.7 (±2.0)
	適宜、ペア看護師との調整、協力ができていた。	6-10 8.5 (±1.6)

表 4. 演習目標の到達度

	範囲	平均(±SD)
多重課題・時間切迫の状況下における基本的な優先順位の考え方が理解できた。	5-10	8.2 (±1.3)
シミュレーション事例における子どもと家族に必要な看護が整理できた。	5-10	8.3 (±1.4)
シミュレーションにおいて、必要となる看護の遂行ができた。	5-9	7.2 (±1.1)
実習に向けての自己の課題を見つけることができた。	6-10	8.7 (±1.4)

ける子どもと家族に必要な看護の整理は8.3点、シミュレーションで必要となる看護の遂行は7.2点、実習に向けての自己の課題の発見は8.7点であり、看護の遂行が他と比べて平均値が低かった(表4)。

V 考察

今回の演習プログラムを通じて、学生は事前に行動計画を立ててシミュレーションに臨んでいたものの、実際にシミュレーションを行うことで【処置準備をしながら子どもに対応する難しさ】や子どもの反応から【環境の安全性を確認】することの重要性に気付いていた。そして、さらに割り込み業務が生じることで、【予定変更による焦り】が起こることや【瞬時に優先順位を決める難しさ】を実感していた。このシミュレーションでの体験をもとに【臨機応変に対応する】ために【判断するための知識・技術】や【子どもの状態・病状を事前に把握】し、【起こりうる状況を予測】することの必要性や【ペアと連携する大切さ】といったことを学ぶことができていたと考える。今回の演習プログラムの主たる目標として、「多重課題・時間切迫の状況下における基本的な優先順位の考え方を説明できるようになる」こと、的確な判断と対応を考え、「シミュレーションにおいて必要となる看護の遂行ができる」こととしていた。以下、演習の目標に沿って学生の学びについて考察し、本プログラムの活用可能性について検討する。

1. 基本的な優先順位の考え方

基本的な優先順位の考え方として、患者の状態として生命に直結するような重症度・緊急性など¹¹⁾¹⁴⁾、時間どおりに計画された薬剤投与や検査、手術出しなど¹¹⁾¹⁴⁾、実施することがらの緊急性¹⁴⁾、仕事全体を把握することや状況に応じた臨機応変な対応、患者の個別性や精神状態¹¹⁾、発達段階を考慮すること¹⁸⁾などが明らかとなっている。また、学生の感想として、優先順位を決定することが困難であると感じていることが明らかとなっている⁹⁾。今回のシミュレーション演習においても、学生は自分で【瞬時に優先順位を決める難しさ】を感じながらも<処置や検査の時間に合わせて行動計画を立てる>ことや【子どもの状態・病状を事前に把握】し、<生命にかか

8.5点と比較的高めの点数であったことによっても支持されている。この理由として、今回の演習では、2人のペアで3人のケースを受け持つという設定を事前に行っていたこと、シミュレーション事例への看護援助を行うための行動計画を考えていたことから、お互いに協力し合うことに対する認識が初めからできていたこと、学生同士でペアを組んでいたことが援助を求めることへの難しさを軽減していたことが考えられる。今回のシミュレーション演習において、ペアで受け持つこととした理由は実習病院の1つでパートナーシップ・ナーシング・システム（以下、PNSと略す）を導入していることにある。PNSとは、2009年に福井大学医学部附属病院で開発されたものであり、「看護師どうしが良きパートナーとなって対等な立場で互いの特性を生かし、相互に補完しあって成果と責任を共有する看護体制」¹⁹⁾であり、2名が1組となって看護ケアを行う。実際の現場では先輩看護師とペアを組むこともあり、今後、実際の臨床現場で連携していくためには、スタッフ同士のコミュニケーションや関係づくり¹¹⁾とPNSマインドの一つである自ら動き、結果を出すという「自立・自助の心」²⁰⁾が必要となる。本演習プログラムでは、実際の臨床現場において、ペアの看護師に協力依頼をできようになるところまで達成できていたかは明らかではなく、この点は本演習プログラムの限界であると考えられる。

3. 小児看護の特徴を踏まえた副次的な学び

今回のシミュレーション演習では、時間通りに業務を遂行することに主眼がおかれることで、一つ一つの看護援助の丁寧な実施や一つ一つの子どもと家族の反応を見ることがおろそかになってしまった可能性がある。しかしながら、このような状況においても、【予定変更による焦り】から、<子どもや家族に声掛けを忘れたこと>に気づき、<子どもに向き合えないと寂しい思いをさせてしまう>ことや<家族の話をしっかり聞いて思いを表出できるような声掛けや環境づくり>など、【子どもと家族への配慮】の必要性について学ぶことができていた。また、<子どもは痛さや怖さを我慢できないため、暴れる可能性があり事故防止を行う>など、【環境の安全性を確認】するという小児看護における重要な点について気付けたことが小児看護の事例で行った効果であり、本演習が活用可能であるといえる。これらの学びが挙げられた理由として、シミュレーション時に子どもや家族の役割を学生がとり、振り返りの際に子どもや家族の視点から感じたことを発表してもらったことに加え、これまで学内実習としてロールプレイを積み重ね、子どもや家族の立場について学生が考える機会をもっていたことが影響していると考えられ、これまでの学生の学びの積み重ねがさらなる学びにつながっていたと考えられる。

VI おわりに

本研究の結果は、学生が体験したことを文章化したものから読み取ったという限界はあるが、今回の学内演習での多重課題シミュレーションは、学生の自己評価による演習目標の達成度からは一定の成果につながったといえる。

今後さらにプログラムを発展させていくために、今回は統合看護実習の一つの分野の履修者という限られた学生の中で行ったが、対象者を増やして検証していくことが必要である。また、昨今の少子化や看護系大学の増加から、小児看護領域では実習施設や受け持ち患者の確保が難しく、実際に病院実習で複数の患者を受け持って実施するためのハードルは高いが、学内演習の成果が

病院における実習でどのように役立つのか、さらには就職後の看護実践にどのような影響を与えたのかは今後、評価していく必要があると考える。

謝辞

本研究にご協力いただいた学生の皆様に深く感謝いたします。

なお、本研究において、利益相反に関する開示すべき事項はない。

【引用文献】

- 1) 日本看護協会『2005年 病院における看護職員需給状況調査』2006, <https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/research/76.pdf> (2021年9月1日閲覧)
- 2) 厚生労働省『新人看護職員研修ガイドライン』2011, <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000128o8-att/2r98520000128vp.pdf> (2021年9月1日閲覧)
- 3) 厚生労働省『新人看護職員研修ガイドライン【改訂版】』2014, https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000049466_1.pdf (2021年9月1日閲覧)
- 4) 内野恵子, 島田涼子「本邦における新人看護師の離職についての文献研究」『心身健康科学』11巻1号, 18-23頁, 2015
- 5) 佐居由美, 松谷美和子, 平林優子, 松崎直子, 村上好恵, 桃井雅子, 高屋尚子, 飯田正子, 寺田麻子, 西野理英, 佐藤エキ子, 井部俊子「新卒看護師のリアリティショックの構造と教育プログラムのあり方」『聖路加看護学会誌』11巻1号, 100-108頁, 2007
- 6) 厚生労働省『新人看護職員の臨床実践能力の向上に関する検討会 報告書』2004, <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2004/03/s0310-6.html> (2021年9月1日閲覧)
- 7) 日本看護協会『2015年 病院看護実態調査 報告書』2016, <https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/research/90.pdf> (2021年9月1日閲覧)
- 8) 日本看護協会『2020年 病院看護実態調査 報告書』2021, <https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/research/96.pdf> (2021年9月1日閲覧)
- 9) 寺田麻子, 松谷美和子, 高屋尚子, 西野理英, 飯田正子, 佐藤エキ子, 平林優子, 松崎直子, 村上好恵, 桃井雅子, 佐居由美, 井部俊子「新人看護師への移行演習プログラムの試行と評価(3) -多重課題シナリオによる演習-」『聖路加看護学会誌』12巻2号, 58-64頁, 2008
- 10) 平林優子, 松谷美和子, 高屋尚子, 飯田正子, 寺田麻子, 西野理英, 佐居由美, 桃井雅子, 卯野木健, 佐藤エキ子, 井部俊子「新人看護師への移行演習プログラムの改善とその評価-臨床の場を使っでの演習と体験者の評価から-」『聖路加看護学会誌』13巻2号, 63-70頁, 2009
- 11) 岡田麻里, 今井多樹子, 井上誠, 近藤美也子, 土路生明美, 船橋眞子, 永井庸央, 松森直美「既習の知識と技術を統合する多重課題演習とシャドウイング実習から得られた3年次学生の学び」『日本看護科学学会誌』37巻, 446-455頁, 2017
- 12) 松谷美和子, 佐居由美, 大久保暢子, 奥裕美, 石本亜希子, 中村綾子, 佐竹澄子, 安ヶ平伸枝, 西野理英, 高井今日子, 寺田麻子, 岩崎寿賀子, 井部俊子「看護基礎教育と看護実践とのギャップを縮める「総合実習(チームチャレンジ)」の評価-看護学生と看護師へのフォーカスグループ・インタビューの分析-」『聖路加看護学会誌』13巻2号, 71-78頁, 2009
- 13) 佐居由美, 笠井愛, 三浦友理子, 中島千春, 福島阿衣, 千々輪香織, 柳橋礼子「看護ゼミナール「チームチャレンジ:多重課題, 複数受持ち実践ゼミ」報告」『聖路加国際大学紀要』4巻, 132-136頁, 2018
- 14) 浅田美和, 笠井愛, 西野理英, 岩崎寿賀子, 鈴木千晴, 柳橋礼子, 佐居由美, 長松康子, 三浦友理子, 林直子, 小林京子, 川端愛「卒業実習チームチャレンジの現状と課題:新人看護師への移行の促進を目指して」『聖路加国際大学紀要』6巻, 91-96頁, 2020

- 15) 浅田義和, 天谷恵美子, 福田順子, 鈴木伸之, 鈴木義彦, 河野龍太郎「新人看護師に対する多重課題シミュレーション研修の実践報告と今後の課題～学習者の満足度と自信の調査に基づく提案～」『Japanese Association of Simulation for Medical Education』5巻, 30-35頁, 2012
- 16) 片山圭子, 谷川茜, 佐藤浩美, 谷浦葉子, 越村利恵「新人看護師に対する看護技術研修の報告 状況を設定し複数の看護技術を組み合わせた多重課題の実施」『大阪大学看護学雑誌』19巻1号, 57-60頁, 2013
- 17) 谷川茜, 岸宏美, 堀井菜緒子, 谷浦葉子「新人看護師に対する看護技術研修の報告 模擬患者とのコミュニケーションを含めた多重課題シミュレーション」『大阪大学看護学雑誌』21巻1号, 41-47頁, 2015
- 18) 下田代智恵「小児看護におけるシミュレーション教育 新人看護師の多重課題シミュレーション研修」『小児看護』37巻4号, 467-475頁, 2014
- 19) 橋幸子, 上山香代子「福井大学医学部付属病院の新看護方式PNS Part I 発想のチェンジとイノベーションで生まれ変わる看護現場」『看護展望』37巻7号, 37-51頁, 2012
- 20) 橋幸子「PNSの特徴とパートナーシップ・マインド」『看護管理』24巻9号, 820-824頁, 2014

